

中国におけるいじめの加害者の特徴と保護者の関係について

立命館大学大学院応用人間科学研究科
対人援助学領域 人間形成・臨床教育クラスター
沈 沂

本研究は2018年12月31日時点で、清華大学が1999年6月に設立されて「知网」(China National Knowledge Infrastructure, CNKI)から、「校園欺凌」と「校園欺負」をキーワードとして検索し、文献の範囲を絞り、最終的に85件が抽出した。中国のいじめに関する研究を対象とし、文献研究法を用いて、研究の歴史的変遷やいじめ加害者に関する議論、いじめ加害者と保護者との関係性に関する研究を考察していく。

研究の結果から、加害者の特徴としては感情が脆弱であり、敏感であり、社会関係に対する適応性及びストレスに対するレジリエンが弱く、社会スキルが欠如していると指摘された。保護者の養育態度、親子関係、家庭教育、家族システムの4つ視点の研究が多かったことが指摘された。中国の学術領域では歴史的な変遷があった。用語は「校園暴力」から「校園欺凌」への移行プロセスがあり、いじめの定義、種類と要因説の精緻化が見られた。いじめ行動には家族から影響を受けているという立場で、養育態度の研究が多かった。保護者はいじめ問題に対して認識が不足しているゆえに子どもへの教育もできなくなる。子ども、特に児童期にあたる子どもは両親の養育態度、夫婦間及び両親と子どもの相互作用が重要なポイントであると考えられる。

対応策として、日本では認知行動療法が子どもの社会スキルを改善することができ、学校不適応問題の解決策として挙げられたが、中国の研究における認知行動療法などの解決策になる文献がなかった。